

氏名	たんげ りえ <b>丹下 理永</b>
学位(専攻分野)	博士(学術)
学位記番号	博甲第757号
学位授与の日付	平成27年9月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	工芸科学研究科 生命物質科学専攻
学位論文題目	<b>現代的なリズムのダンスにおける楽しさと感情表現に関する研究</b>
審査委員	(主査)教授 野村照夫 教授 遠藤泰久 教授 中島敏博 准教授 来田宣幸

### 論文内容の要旨

本論文は、中学校の体育で必修化されたダンス領域の1つである現代的なリズムのダンスに着目し、その楽しさと感情表現について、演者の心理的および表現動作分析的観点よりダンスパフォーマンスを評価することを主目的とした。その主目的を達成するため、本論文は3つの基礎論文を基に5章で構成された。第1章では序論、第2章ではダンス発表時におけるフロー体験の検討、第3章ではダンスステップにおける感情表現の検討、第4章ではダンスステップにおける楽しさの表現の検討、第5章では総括を述べた。

第2章では、演者が抱く楽しさについて、内発的動機付けにおける楽しさに着目し、フロー理論を用いて日本語版 Flow Sate Scale を改編したダンス・フロー・スケールを作成した。高校生を対象にダンス発表時のフロー体験について質問紙調査を行った結果、ダンス発表時の楽しさは、「ダンススキルの有能感」「夢中」「自己意識の喪失」で構成されていた。さらに、評価実用化の検討としてダンス経験の有無と指導スタイルの違いについて分析した結果、体育授業外でのダンス経験がある者が体育授業のみの者に比べ「ダンススキルの有能感」「夢中」「自己意識の喪失」が有意に高い値であった。また、指導スタイルの違いについては、ダンス専門教員による一斉指導の演技と生徒主体の創作演技による群で検討した結果、「ダンススキルの有能感」では差はみられなかったが、「夢中」「自己意識の喪失」では一斉指導群の得点が有意に高い値であった。これらの結果より、生徒が体育授業のみで高いフロー体験を得るには、ダンス単元を継続して実施することが生徒によりフローを経験し、生涯にわたってダンスを行う資質を育む上で重要であること。そして、生徒が創作した作品を発表しフローを体験するには、指導者は生徒に今ある技能や能力を用いて創作させるのではなく、生徒にとってふさわしい挑戦課題見つけ、適切な助言や支援を行うことが必要であることが示唆された。

第3章では、多様な感情によるダンスステップの表現動作を検証した。ヒップホップダンスのステップであるニュージャックスイングを取り上げ、楽しさ、悲しさ、怒りの感情表現を三次元動作解析にて動作特徴を分析した。仮説として、感情の違いによる表現は脚の運びによって行われ、異なる動作特徴をもつと設定した。説明変数として時空間に関する34変数を設定し、動作局面4局面と姿勢局面4局面の8局面に分類して分析した結果、特にパンチを打つ動作で感情が判

別された(63.3%)。そのため、ニュージャックスイグにおける感情表現は主に上肢で行われており、仮説を一部否定するものであった。特に楽しさの表現は悲しさに比べ左右の上肢や下肢の動きが速く、怒りの表現は悲しさに比べて左肩関節スピードが速く、肘関節間距離や右足関節角度が大きいことが明らかになった。

第4章では、ニュージャックスイグにおける楽しさの有無による表現動作を検証した。仮説として、楽しさの表現は脚の運びによって行われ、異なる動作特徴をもつと設定した。第3章と同様に三次元動作解析を行い判別分析および動作特徴量を明らかにした結果、楽しさの表現の特徴は、無感情に比べて両足ジャンプによる横移動に伴う両手の開きが速く、特に左肘関節と左手首に関連があったことが明らかになった。この結果は、多様な感情による表現と同様に仮説を一部否定するものであった。したがって、ニュージャックスイグにおける多様な感情や楽しさの感情表現は、主に上肢で行われていたことから、上肢は感情表現を行う上で重要であり、表現指導において指標になることが示唆された。

本論文の成果より、ダンス指導や実践場面において、今まで感覚的にとらえられていた楽しさや表現について、実施者の内面性および外面性より定量的な評価が可能であることが示された。本研究で得られた知見は、今後の舞踊教育に寄与するとともに、現代的なリズムのダンスにおいて新たな視座を与えるものとする。

## 論文審査の結果の要旨

本論文では、中学校の体育で必修化されたダンス領域の1つである現代的なリズムのダンスに着目し、その楽しさと感情表現について、演者の心理および表現動作よりダンスパフォーマンスを評価することを主目的とした。本論文は、これまでに感覚的に捉えられていたダンスの楽しさや表現について実施者の内面性および外面性から定量的評価を行った点で、新規性および独創性が認められた。

はじめに、実施者の内面性の検討として内発的動機付けにおける楽しさに着目し、フロー理論を用いてダンス・フロー・スケールを作成した。高校生を対象に体育授業にて質問紙調査を行った結果、ダンス発表時の楽しさは、「ダンススキルの有能感」「夢中」「自己意識の喪失」で構成されていた。また、評価実用化の検討として、ダンス経験の有無と指導スタイルの違いについて分析した結果、生徒が体育授業のみで高いフロー体験を得るには、ダンス単元を継続して実施することが生徒によりフローを経験し、生涯にわたってダンスを行う資質を育む上で重要であること。そして、指導者は生徒にとってふさわしい挑戦課題見つけ、適切な助言や支援を行うことが必要であることが提案された。

次に、実施者の外面性による楽しさの検討では、多様な感情によるダンスステップの表現動作と楽しさの有無によるダンスステップの表現動作を検証した。現代的なリズムのダンスとして行われるヒップホップダンスを取り上げ、そのステップであるニュージャックスイグを動作解析した結果、感情の違いによる表現はパンチを打つ動作で判別された。また、楽しさの有無による表現では、無感情に比べて両足ジャンプによる横移動に伴う両手の開きが速く、特に左肘関節と左手首に関連があったことが明らかになった。これらの結果より、ニュージャックスイグにおける多様な感情や楽しさの感情表現は、主に上肢で行われていたことから、上肢は感情表現を行う上で重要であり、表現指導において指標になることが提案された。

現代的なリズムのダンスに関する研究はまだ少なく、本論文では、実施者の内面性および外面性より楽しさや表現について定量的評価を行った点が意義深い。

なお、本論文の内容は、レフェリーによる審査を経た2編の論文[1,2]および1編の受理済みの論文[3]を基に構成されており、これらの論文はいずれも申請者が筆頭著者である。

#### [主論文]

##### 1. 小島理永, 野村照夫, 来田宣幸

高等学校ダンス発表時におけるフロー体験の検討 ―ダンス・フロー・スケールの開発にむけて―

スポーツパフォーマンス研究, 4, 44-58, 2012.

##### 2. 小島理永, 野村照夫, 来田宣幸

ヒップホップダンスにおける感情表現の検討 ―ニュージャックスイングに焦点をあてて―

京都滋賀体育学研究, 31, 1-10, 2015.

##### 3. Rie Kojima, Teruo Nomura, Noriyuki Kida

Expressing Joy Through Hip-Hop Dance Steps: Focus on New Jack Swing.  
Journal of Music and Dance, (Acceptance JMD/05.01.15/0035).